

大学教育における児童文学作品の活用(1)

— カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (1)

— Based on the Lives and Works of E. L. Konigsburg and A. Lindgren —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術学部)

大学における児童文学作品利用

児童文学作品や絵本作品には、「〇歳から」、「小学〇年以上」などと、読者の年齢や学年の目安を付してある場合が少なくない。一方、管見ながら、その上限年齢を記したものはない。それにもかかわらず、ほとんどの児童文学作品は、小学校の図書館や地方自治体の児童書コーナーに置かれるのみで、中学生や大人向けの書棚にはない。そのため、中学生以上になれば、児童文学作品と触れ合う機会は激減し、高等学校や大学の図書館では、児童書は幼児・児童教育や美術を専門とする教育機関でしかほとんど見られなくなる。しかし、それは非常に惜しいことではなからうか。

子ども時代に虜になった作品を大人になってから読み返したり、子どもに人気のある作品を大人目の目で読み解いたりすると、幼い頃の自分のみならず、子どもたち全般が何に惹かれるか、何故それに惹かれるか、が分析できるようになる。それは、子どもの頃の自分を客観的に見つめなおすことでもあり、現在の自分にある、良い意味でも悪い意味でも子どものような部分を整理することでもある。つまり、更なる成長の契機となり得るのだ。このような作業は、自己分析ができていない大学生にとっても、非常に重要なことである。また、学生の気持ちを理解しようとする筆者ら教員にも有用であろう。

また、児童文学作品には人間の本質が上手く描き出されていることが多々ある。これも自己と他者の分析ができず、人間関係に苦しむ大人にも大いなるヒントとなるであろう。まだ若く、素直で、視野が狭く、硬直しがちな思考の大学生には、己と他者を分けて考える訓練が特に必要だが、そのような彼らにも児童文学作品の読み直しを勧めたいところである。

以上と比べれば些末なことではあるが、児童文学作品を丹念に読めば、所謂「知識」を増やすことも可能である。例えば、筆者は『ズッコケ三人組』シリーズの『ズッコケ財宝調査隊』¹⁾という児童書で、北京原人の最初に発見された化石が戦争の混乱で行方不明になった、という歴史的事実を学んだ。他にも、旧満州を舞台にした『二つの国の物語』²⁾では、彼の地では柳絮という柳の綿が飛ぶことで、季節を感じることや、高粱(コーリヤン、高黍、モロコシ、唐土、蜀黍)というイネ科の穀物がある、という生活や風土の一端

を知った。『ぼんぼん』³⁾シリーズでは、かつての大阪では繊維業の取引が盛んで、他の繊維業の盛んな愛知県にも取引先があっても不思議ではない設定や、歌劇団で有名な宝塚音楽学校が戦前からあったことなどに筆者は感銘を受け、地図を広げたものである。他にも、そうした例は枚挙に暇がない。

また、外国の作品からは、大きく異なる文化の様々な風習や事物を知ることができる。翻訳作品からは、翻訳者が韻を踏むなどの「ことば遊び」の翻訳に苦労したであろう台詞の訳語の粋を味わうことができる。また、日本の子どもたちには一般的ではない事物について知ることができる上、どのような註釈を入れているか、翻訳者の工夫にも触れられる。その作品が一代も二世も過去のものであれば、今の日本では巷間知られるようになった事物も、かつては知られていなかった、という時代の移り変わりを感じられる場合もあるのだ。

以上のような学びは、筆者が本務校である名古屋芸術大学に2017年度に設置、開設された芸術学部芸術学科芸術教養領域の教育目標とも深く関わり、また全学の学生のカリキュラム目標とも切り離せないものである。本稿では、筆者が本務校の芸術教養領域で担当する科目の「異文化体験」、「セミナー」、「卒業研究」、また、全学総合共通科目（所謂、教養科目）の「感覚の生物学」、「子育てとアートの人類学」、「環境・社会と科学」、「大学生になる（所謂、入門ゼミ）」、「日本語表現」や、その他の授業科目の中で有用な事例や、そもそもの学修の動機付けなどに役立つような事例を名作の児童文学作品と、その作者の経歴から採り上げる。

数ある児童文学作品のうち、本稿では半世紀ほど前の作品である、米国のエイレン・L・カニグズバーグの『魔女ジェニファとわたし』⁴⁾、スウェーデンのアストリッド・リンドグレーンの『やかまし村のこどもたち』⁵⁾シリーズ三部作を選んだ。その理由は以下の通りである。両者とも、発表から半世紀経った、現在の日本、つまり時代も風土も異にする日本にある多くの公立図書館の児童書コーナーでも、閉架ではなく開架図書となっていることである。つまり、図書館とその資料の専門家である司書たちも、両作品を開架にしておく価値があると考えているのであろう。また、現在の大学生が子どもの頃に読んでいた人が少なくないことも挙げられる。これらの点において、両者とも今後も長く残っていく名作であり、それ故、汎用性が高いと考えられる。また、いずれも小学生の少女が主人公で、物語の一人称の語り手であることが、本務校に多く在籍する学生の自己分析のためになると思われるからである。また、著者が両方とも女であること、語り手の主人公が少女であることが、本務校の約三分の二を占める女子学生の気持ちに響く可能性が高いだろうと考えられることも理由である。

授業で活用できる具体例

上述した、本稿で主に取り扱う作品と、その作者について、以下の小項目毎に分けて概

略を述べ、授業で活用できそうだとと思われる具体例を記す。著者名は結婚で姓が変化するため、名前（所謂 first name）で記すこととする。

エイレン・L・カニグズバーグ

米国の児童文学作家のエイレン・ローブル・カニグズバーグ (Elaine Lobl Konigsburg) は、1930年にアメリカ合衆国のニューヨークで、ハンガリー系のユダヤ教徒として生まれた。その後、ペンシルベニア州に転居し、優秀な成績で高校を卒業後、大学進学を目指して働き、学費を貯めた。後年、その職場のオーナーの家族の息子と結婚するに至った。元々は文学を志向していたのではなく、カーネギー工科大学で化学の学位を得た、所謂「理系女子」である。彼女は修士号を取るために別の大学で研究を始めたが、爆発事故を起こしたことで、自身は化学に向いていないと自覚したという。その後、フロリダ州に転居し、暫く化学の教鞭を執っていたが、辞め、子どもを三人儲けた。ニューヨーク郊外に転居後、創作活動を始め、絵画も学んだ。これが、彼女の作品に入れる挿絵や表紙を、自身の手で描く契機ともなった。晩年はフロリダ州に居住し、2013年に83歳で没した。この項の記述の多くは、T. Jordan (2013)⁶⁾と、岩波少年文庫⁴⁾の解説によるところが大きい。

作家としてのエイレンは、多作で有能だった。彼女の作品は多数、日本語に翻訳された。彼女は、1967年に初めて『魔女ジェニファとわたし (Jennifer, Hecate, Macbeth, William McKinley, and Me, Elizabeth)』、『クローディアの秘密 (From the Mixed-up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler)』を出版した。この二作が翌年のニューベリー賞を争う、ということが話題となった。後者はルイスキャロルシエルフ賞、ウィリアムアレンホワイト児童文学賞も受けた。それから約30年後の1997年に『ティーパーティーの謎 (The View from Saturday)』で二度目のニューベリー賞を受賞した。他に幾つかの受賞作がある。

これら以外のエイレンの作品は、『ロールパン・チームの作戦 (About the B'nai Bagels)』、『ほくと〈ジョージ〉 (George)』、『ほんとうはひとつの話 (Altogether, One at a Time)』、『誇り高き王妃 (A Proud Taste for Scarlet and Miniver)』、『ドラゴンをさがせ (The Dragon in the Ghetto Caper)』、『ジョコンダ夫人の肖像 (The Second Mrs. Gioconda)』、『なぞの娘キャロライン (Father's Arcane Daughter)』、『800番への旅 (Journey to an 800 Number)』、『エリコの丘から (Up from Jericho Tel)』、『Tバック戦争 (T-Backs, T-Shirts, Coat, and Suit)』、『13歳の沈黙 (Silent to the Bone)』、『スカイラー通り19番地 (The Outcasts of 19 Schulyer Place)』、『ムーンレディの記憶 (The Mysterious Edge of the Heroic World)』等があり、日本では主に岩波書店で翻訳出版されている。

以上の経歴等自体も興味深い上に、様々なことを教材として活用できる。エイレンがハンガリー系ユダヤ人、ということ自体が、異文化や歴史学の授業では、アメリカの歴史、

欧州の歴史、ユダヤ人迫害の歴史を語る際の導入として有用であろう。例えば、何故、ハンガリーのユダヤ人がアメリカに渡って来たのか、そもそもユダヤ人とは何か、ハンガリーは言語学的にも欧州では特異的な国であること、などである。上に挙げた彼女の著作の中に『ロールパン・チームの作戦』があるが、原題は『About the B'nai Bagels』であり、今は日本でも至る所で売られるようになったベーグルがユダヤ人の文化のものである、という話もできる。更に、ベーグルが一般的ではなかった日本ではロールパンと訳したことも時代変化として伝えられる。また、『エリコの丘から』のエリコからも、旧約聖書（ユダヤ教では聖書）の『ヨシヤ記』にあるエリコの戦いや、イスラエルとパレスチナの紛争、中東戦争についての話にも広げられる。

他のエイレンの著書のタイトルだけでも、学修の契機は持たせやすい。上で触れたベーグルやエリコだけではなく、ジョコンダ夫人とレオナルド・ダ・ヴィンチの名画『モナリザ』の関係、米国独立史や現代米国政治におけるティーパーティーの持つ意味、などである。また、英語の原題と、邦訳版のタイトルの違いは、英語学習でも役立つだろう。

また、この女性作家が生まれ育った時代の、大学教育を受けるため、高校卒業後に働いて学費を貯める、という生活は、高校から直接大学へ進学する、現在の多くの日本の大学生とは異なる道を歩んでいることが分かる。今の学生と異なる点は他にもある。例えば、エイレンが化学を学びながら、絵画も学び、文学の道で成功した、ということからは、日本の近代化における学校教育政策の特徴を述べることも可能だ。また、高校で理系、文系であっても、大学で学んだ学部がどこであっても、将来の道は限定されない、というキャリア意識を醸成する上でも重要なことであろう。

彼女の学んだカーネギー工科大学についても、知ると視野が広がるが多々ある。創立者は、大学名にもなっている、アンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie）である。ただし、彼が建てた1900年当時は、技術学校であった。工科大学に改称し、学位を出せるようになったのは、その約十年後のことであった。彼は1835年にスコットランドで生まれ、アメリカで成功した鉄鋼王である。事業で得た多額の収益を文化や教育の分野に振り向けた、欧米の正統的な富豪である。例えば、ニューヨークのマンハッタンにある音楽の殿堂として世界的に知られるカーネギー・ホールも彼が建てた。それ以外にもカーネギーは、研究所や博物館、図書館などにも収益を寄付した。富を社会や文化に振り分ける彼のような富豪は、欧米では大勢おり、今の日本でも少しずつ増えてきている。金銭の遣い方と人間の品格について考える上でも重要な事例となる。

魔女ジェニファとわたし

エイレンが著した『魔女ジェニファとわたし』の物語は、ニューヨーク郊外にある小学校に転校してきた小柄な少女・エリザベスが、通常の道路ではなく、気に入っている林を抜けて学校に向かう途中で、黒人の少女であるジェニファに会うことから始まる。主人公

にして語り手のエリザベスの視点で物語が進んでいく構成である。エリザベスとジェニファの同級生には、大人には良い面だけを巧くアピールして、先生や親たちからの称賛を勝ち得ている嫌なタイプの優等生的なキャラクター、シンシアがいる。シンシアが大人の見えていない前では他の子どもたちに意地悪をする様子も描かれている。他には、シンシアの仲間や、同じアパートに住む子どもたち、親や学校の先生などが登場する。

ジェニファは魔女を自称し、エリザベスを自分の弟子にすることで、二人の遊びが始まる。二人は学校の外にある図書館や公園、林などで、ともに時間を過ごすようになる。魔女の「修行」という名の、不思議な遊びを続けて行くうち、エリザベスはジェニファと衝突したり、ジェニファを嫌になつたりすることが度々起こるようになる。しかし、エリザベスはジェニファの面白い話や行動に惹かれて、弟子の立場であり続けるのだ。しかし、物語の最後に転換が起こる。長い間、二人が可愛がっていたヒキガエルを殺さなければ作れない魔法の薬を作る段になり、遂にエリザベスは耐えられなくなってしまふ。結局、彼女はジェニファと決裂してしまった。そうしたものの、エリザベスはジェニファと遊べない日々が寂しくなり、物足りない日々を送ることになった。

その頃、エリザベスは、ジェニファが魔女修行に必要な様々なものや、学校の劇で使う珍しい物、骨董品のようなハロウィン（万聖節前夜）の仮装衣装などを、彼女の父親の職場で入手したのだろう、と悟った。ジェニファの父親は、富豪で骨董品収集家のサメルソン夫人の所有する温室で働く庭番だったのだ。そのため、ジェニファは珍しい品々を手に入れられたというわけだ。一方、ジェニファも寂しくなったようで、留守番をしているエリザベス宅を訪れ、二人は仲直りできた。それからの二人は魔女とその弟子という関係ではなく、仲の良い友達として過ごすようになった、ということで物語は締めくくられる。

以上があらすじであるが、筆者は授業で、この話にある幾つかの重要な点を説明してきた。例えば、ジェニファが黒人である、ということは、物語の最初の方では分からない。挿絵も、曖昧に描いてある（ただし、後でよく見れば、黒人の少女を描いたと分かるようになる）。物語の中盤に、学校劇の観客としてやってきた母親たちの中で、たった一人だけ黒人の母親がおり、その人がジェニファの母だと分かった、という記述がある。ここまで、多くの読者はジェニファが黒人だとは想定せずに物語を読み進めるであろう。もちろん、巻末の解説や、少年文庫版の裏表紙にある紹介文には、ジェニファが黒人であることが記されているが。このことは、日本に住む少なくとも人々が「アメリカ人」と言われてイメージする人物像の多くが白人であることを示している。それは、無意識に身につけた偏見ともいえる。異文化の理解では重要な場面である。

また、主人公とジェニファが出会い、意気投合するのはハロウィンの仮装をしている時のことである。岩波少年文庫にある1970年の邦訳版⁴⁾では、「ハロウィーンまつり」と表記され、また、子どもが各家を回って、「Trick or Treat」の言葉でお菓子を貰うことは、「ハロウィーンのおふせまわり（おねだり）」と訳されている。邦訳の時代の差を感じさせ

る点でも、教養を深める契機となろう。また、巻末にある、訳者である松永ふみ子の「訳者のことば」では、ハロウィンの解説があり、「Trick or Treat」を「お菓子くれなきやいたずらするぞ」として紹介している。2019年現在の日本では多くの人が知ることとなったハロウィンを、1970年に翻訳した時には、解説しなければ通じないことだった、という約半世紀の変化も感じ取れる。

また、伊藤紀美江⁷⁾が記すように、1960年代のアメリカの白人中流家庭で開かれる子どもの誕生パーティーで、どのような遊びをするものなのか、また健康食品、自然食品のブームの様子、それを戯画的に描き、皮肉を感じさせる描写も、学生たちのみならず、筆者ら教員も知的好奇心を刺激されることである。他にも、この時代のニューヨーク郊外の集合住宅にエレベーターが設置されていたことや、このアパートが建てられている位置が丘の上で、その麓にはニューヨーク市内へ向かう電車が発着する駅があり、反対側の麓には学校がある、という描写は、日本の高度経済成長期の集合住宅や都市開発と比較対照する契機ともなろう。また、エリザベスの父親のおじ夫妻（主人公からすれば大おじと大おば）が年末に泊まりに来る場面では、義理の親戚に当たる母親が、彼らに遠慮してストレスを抱える描写もある。家族関係や親戚付き合いが、日本同様、この時代のアメリカの主婦をも悩ませたと想起させられる。

ところで、翻訳者の松永の解説には、ジェニファが魔女になったことを、「殻にとじこもって」たとし、そこからジェニファが「さいわい冷静な常識家エリザベスのおかげでふつうの子どもの世界にもどることができ」たとある。しかし、この部分には首肯できない人も少なくなかろうと思われる。ジェニファについて、「頭がきれて感受性が強く、誇り高い」と記してあることに頷ける読者は多そうであるが、殻に閉じこもっていた、と批判的に記すことは、妥当だろうか。

米国では公民権運動により、1964年に公民権法（Civil Rights Act）が制定され、法律上の人種差別が解消され、その公民権運動の先頭に立っていたキング牧師がノーベル平和賞を受賞した。そのような法制度ができたとはいえ、この物語が出版された1967年は、現在よりも黒人差別が酷かった時代であろう。このような時に、白人が大多数を占めた学校に、ただ一人通うジェニファが自分の「殻にとじこもって」るような行動をとっても不思議ではない。また、彼女は毎週土曜に、図書館に赴き、沢山の本を借り出し、司書とも顔馴染みである。知識が豊富で、学校外に居場所を見つけているジェニファが殻に閉じ籠っていたという解釈は果たして妥当だろうか。また、まだ小学校5年生で、学校の教師や親がシンシアの正体を見抜いていないことに腹立たしい思いを抱き、親に対する秘密を抱えている、健全な10歳くらいのエリザベスを、「冷静な常識家」と表現することには疑問を抱かされる。何より、「ふつうの子どもの世界にもど」れたという表現も、妥当なのだろうか。「戻った」のか、単に「変わった」のかは不明である、というだけではなく、そもそも「ふつうの子どもの世界」とは何であろうか。また、「ふつうの子どもの世界」

というものがあつたとして、そこに入ることが、それほど良いことなのだろうか。

物語が進んで行くにつれ、ジェニファとエリザベスは、魔女と魔女の弟子、という師弟関係、上下関係ではなく、対等な友人となっていく。エリザベスがジェニファの話すこと、魔女であることを疑う記述や、ジェニファに怒りを抱いても、その友人と所謂「世間話」ではない、心惹かれる会話や遊びができないことを考え、付き合いを続けて行く場面が丁寧に描かれている。このことを踏まえれば、訳者の解釈に疑問を抱かざるを得ない。学生には、翻訳者に限らず、解説者全般が、全て正しいこと、全員に首肯されることを記すわけではない、と考えさせる好例でもある。また、このことを通じ、大学は暫定的に正しいようなことを学ぶ場、ということも合わせて知らしめることができる。

アストリッド・リンドグレン

Jens Andersen に拠れば⁸⁾(以下の記述の大半も同書に拠る)、スウェーデンを代表する児童文学作家にして、児童書の編集者でもあるアストリッド・リンドグレン (Astrid Lindgren) は、1907年、スウェーデン南東部のスモーランド地方の田園地帯・ヴィンメルビューで、父親のサミュエル・アウグスト・エリクソン (Samuel August Ericsson) と母親のハンナ (Hanna) の間に誕生した。仲の良い兄と、二人の妹の間の長女で、教会の敷地内にある農場で農業に従事し、信仰心に篤い両親に囲まれた幸福な子ども時代を過ごしたという。この子ども時代が、後述する『やかまし村』シリーズなどに活写されている。ちなみに、彼女の故郷には、アストリッドの子ども時代を再現したテーマパーク「アストリッド・リンドグレン・ワールド (Astrid Lindgren Värld)」⁹⁾がある。

アストリッドは15歳で地元の新聞社で研修生として働き始め、その文才を活かした。その頃、若者らしく、当時、新しかったジャズやダンスに惹かれ、「自由な女になりたい」と考えるようになったらしい。その象徴的な出来事が、短髪になることであった。19歳の時に勤務先の社長にして上司、そして妻も愛人もいた、親ほど年上のレインホルト・ブロムベルイ (Reinhold Blomberg) との間に、子を生し、未婚の母となった。当時のスウェーデンでは、避妊をする知識を持った女は稀で、人工妊娠中絶も合法化されていなかった。ある政治家が、1910年に女性労働者向けの講演会で避妊具について述べたところ、投獄された。避妊具の宣伝はおろか、公の場での言及も禁じる法律が1930年代まであったという。

1926年にアストリッドとその上司は、胎児が非嫡出子とならないように計画し、婚約した。お腹が大きくなったアストリッドは周囲に妊娠を隠せなくなり、首都のストックホルムへ単独で転居した。ここで、タイプライターの打ち方や、経理、貿易の事務、速記法など、秘書教育を受けた。この頃、望まない妊娠をした妊産婦たちを助ける活動をしていた女性弁護士の助けを借りることとなった。彼女の推薦で、アストリッドはデンマークのコペンハーゲン王立病院で1926年12月の初旬に出産し、クリスマスには出産を援助して

くれた養母に子どもを預けた。子どもは男児で、ラース（Lars）と名付けられ、アストリッドは彼をラッセと呼んだ。彼女は一旦、故郷に戻り、再びストックホルムで学校に通いながら、貧しい暮らしを送った。子どもとの別離は三年に及んだ。ただし、アストリッドは週末の休日を利用し、時間と費用が許す限り息子に会いに行った。

敬虔で勤勉なアストリッドの両親はこの妊娠と出産を悲しんだが、アストリッドとプロムベレイとの連絡を仲介するなど、母子を援助したという。親切的な養母も毎月、息子の成長をアストリッドに手紙で伝えた。

出産の翌年、アストリッドは就職した。子どもの父親も離婚調停が成立した。このプロムベレイは離婚後、すぐ、アストリッドに求婚した。しかし、アストリッドは後妻となり、彼の子どもと暮らすことや、自分に過大な干渉をする彼に嫌気がさし、結局、二人は別れることとなった。

1929年、アストリッドに、デンマークから養母の病のため、息子を養うことができなくなったと連絡があった。別の養母宅へ預けられても、息子のラッセが養母を慕って泣く様子を見たアストリッドは、衝撃を受けたという。この経験が後年、彼女が子どもの預け先をご都合主義的に変える行政に不満を抱き、子どもの権利の擁護運動をする大きな動機になった。ちなみに、アストリッドは子どものみならず、動物の権利の擁護者としても知られた。

同じ頃、アストリッドは職場で出会ったスチューレ・リンドグレン（Sture Lindgren）と交際していた。彼は後年、彼女の夫となった。アストリッドは彼に息子を引き取ることを報せた後、息子とストックホルムで暮らすことにした。しかし、百日咳で苦しむ幼子を抱えながら働くことはできなくなり、実家の両親が息子を預かってくれることとなった。両親の理解を得、田舎の噂にも耐えて、周囲に息子の存在を認めさせた経験は、彼女の作品や生き方にも大きな影響を与えた。

アストリッドは、スチューレとの間に娘のカーリン（Karin）を儲けた。『長くつ下のピッピ』シリーズは、この幼い娘のために考案されたものだという。大塚勇三の巻末翻訳者解説に、尾崎義の言葉として紹介されている逸話は以下である。アストリッドの幼い娘は『あしながおじさん（スウェーデン語 Pappa Långben）』という名称から、「長くつ下のピッピ（Pippi Långstrump）」、という名前を思いつき、その女の子の話をして欲しい、と母親のアストリッドにせがんだ。アストリッドは、娘のために毎晩、ピッピが活躍する話をしてやり、それをまとめたものが、この作品となったという。そして、これがアストリッドの出世作となった。

『長くつ下のピッピ』や『やかまし村のこどもたち』シリーズ以外にも、数多の作品を世に送り出したアストリッドが、2002年に94歳で没した年、スウェーデン政府が彼女の功績を記念し、児童・青少年のための文学賞としてアストリッド・リンドグレン記念文学賞を創設した。

彼女の一生、特に前半生は、ジェンダーやフェミニズム、女性学などの授業では重要なケースになるであろう。現在、正否は別として、「進歩」の極みであるスウェーデンですら、現在から百年前には女の自由が得にくい社会だったことが分かる。また、避妊具の宣伝を公にできなかったこと、人工妊娠中絶が合法でなかったことは、家族計画ができない問題や、倫理や道徳と生命の誕生、性交渉との複雑な関係を考える上で、重要な事実であろう。

また、アストリッドが子どもを産むとき、デンマークに渡り、彼の地の養母に息子を預けた後、時々会いに行っていた話は、デンマーク語とスウェーデン語は共にゲルマン系の言語で、違いが少ないことが背景にある。欧州諸語は、そのほとんどがインド・ヨーロッパ語族の屈折語で、語順の基礎も同じで、種々の単語の語源も共通している。アストリッドのエピソードは、こうした言語学や文化人類学の学びの契機ともなる。また、彼女が両国を行き来した際のルートを具体的に考えれば、北欧のバルト海、北海、スカンジナビア半島、ユトランド半島周辺の地理を学ぶ機会ともなろう。

『やかまし村の子どもたち』シリーズ

これは、アストリッド・リンドグレーンの作品で、『やかまし村の子どもたち (Alla vi barn i Bullerbyn、英語の直訳は All the kids in Bullerbyn、やかまし村の子みんな)』(原書は1947年)、『やかまし村の春・夏・秋・冬 (Mera om oss barn i Bullerbyn、英語の直訳は More about us children in Bullerbyn、やかまし村の私たち子どもについてもっと)』(原書は1949年)、『やかまし村はいつもにぎやか (Bara roligt i Bullerbyn、英語の直訳は Just have fun in Bullerbyn、やかまし村はただ楽しい)』(原書は1952年)の三冊がある。

前項にも記したように、「やかまし村」や、そこで過ごす子どもたちの生活は、アストリッドの故郷と幸せな子ども時代をモデルとして描かれている。主人公にして語り手は、幼い少女のリーサで、彼女の目から見た村、その近隣の様子や、家族と使用人、近所に二つだけある家に住む友人とその家族、使用人、リーサたちが通う学校や教師、その他のさまざまな生活をする大人たちが語られている形式である。アストリッドの出世作であった『長くつ下のピッピ』のような破天荒で、実在しないような登場人物はおらず、平凡で勤勉で善良な人々や、少し意地悪なところ、偏屈なところがある、当時のスウェーデンの地方に住む市井人と、彼らの温かくて穏やかな、四季折々の生活が描かれている。

このシリーズで学ぶべきことは、平凡な生活の重要性や、それを振り返ることの楽しさであろう。語り手のリーサや、それ以外の子どもたちにとっては大きな事件や出来事が時々起こるが、「よくある」タイプの日常の延長である。この物語が書かれた半世紀以上前のスウェーデンとは異なる、21世紀初頭の現代日本でも、この日々の出来事の根底にあるものは、共通している。例えば、友達や兄弟姉妹との楽しい遊びのなかで、時々、ふとしたことで意地の張り合いになり、喧嘩をしまい、気まずい状態に陥ることは、ど

の時代の、どのような文化的背景のある子どもたちの世界でも起きていることではないだろうか。物語では、その喧嘩で一人ぼっちの詰まらない時間を過ごしている主人公に、母親がカステラを焼くよう勧め、気を紛らわせる場面が出てくる。リーサが作ったカステラと、作ることそのものへの取り組みが、友達との仲直りの契機になることも、共感できる人は多かろう。また、都会から来た少女の気を引きたいため、目立つ行動をする少年たちの話も、自己承認欲求という単語を出すまでもなく、今の日本でも非常に理解しやすいことである。

また、8歳の誕生日プレゼントに個室と簡単な家具を貰った幼いリーサが、自分の成長を感じた喜びや、自身のスペースを自主的に運営していく責任を負う誇らしさは、多くの人々に実感を伴って伝わることであろう。ほかにも、特に幼い頃は、年上の兄姉が、兄弟姉妹の遊びの主導権を握っている、というエピソードも、弟妹の立場であった人々には深く理解できることではなかろうか。

加えて、子猫を貰ってきたり、意地悪な飼い主から犬を救い出したり、卵からヒヨコを孵化させて名付け、愛着を抱いたり、ネズミを捕まえてペットにしようとしても逃げられたり、子どもが自ら育てた子羊の世話に飽きたり、それを乗り越えて育てて大きくなった子羊のことが愛おしくなったりする、といったエピソードも、ペットを飼いたいと思っている子どもや、飼育経験をもつ人々には深く共感できるであろう。

また、自習態度が悪かった男子たちが、戻ってきた先生に叱られ、授業後も残された時、彼らが追い付けるよう女子が故意に帰路を緩慢に歩き、帰宅後に親から叱られないように気遣う場面、学校からの帰路にキャンディーを口の中で長時間保たせる競争や、唾を飛ばす競争をすること、買物に勇んで出かけたものの失敗をする話などは、多くの人々が子ども時代を思い出すには格好のエピソードではなかろうか。

本シリーズに出てくる、友達とともに、親の服を借りて変装したり、手紙を送り合ったり、その手紙の内容をゴッコ遊びにしたり、秘密基地のような小さなスペースを設営したり、ということは、古今東西の多くの人々にも理解できる愉快的な遊びであろう。垣根や石の上だけを歩き、地面を踏まないようにして移動する遊びや、仲間内だけで通じる暗号的な言葉で会話する遊び、上品なマダムになり切ったごっこ遊びも、日本でも広くみられる。

鳥の卵など、大人からは価値を感じられないものを収集する趣味なども、現在の日本の子どもたちには理解しやすいことであろう。『アラビアンナイト』の本を主人公が兄に借りに行く話も、今の日本でも名作として読み継がれている物語を、この頃のスウェーデンの子どもも読んでいたことが分かり、興味深い。地方の小さな村で暮らす子どもたちに、学校の先生が首都のストックホルムで買ってきたキャンディーをあげる話が、楽しいエピソードとして描写されているのも、都会に憧れる地方で暮らしてきた人には理解しやすいだろう。

加えて、主人公のリーサたち少女二人が、幼い赤ん坊の世話を楽しんでしている様子や、赤ん坊が思い通りにならず、失敗してしまう話も、子守をしたことのある人なら領けるであろう。学校の先生に「人を幸せにしよう」と言われ、真面目に実行しようとしたものの、失敗し、全くそのような計画をせずにした親切が、同級生を幸せにした話も、思い当たることのある人も少なくないのではないか。

筆者の担当する「異文化体験」の授業で学生に伝えやすいものは、この物語が書かれた頃のスウェーデンでは、誕生日祝いはその日の朝から始まる、というエピソードである。誕生日を祝ってもらう側は、朝、目が覚めてもベッドの中で眠ったふりをし続け、ココアと花を挿した花瓶、ケーキを寝床に持ってきってもらう風習があったのだ。このような風習は、日本では一般的ではない。ちなみに、朝、誕生日の主人公に持っていく品物には、親からの誕生日の贈物も添えられるという。

また、長い夏休みの前に試験があり、その頃には学校を多数の花や葉で飾り立て、国旗を掲げる、というしきたりも、今の日本では全く考えられないことであろう。試験では晴れ着を着る、という習慣も、音楽大学の実技試験の正装や、入学試験を受ける際の制服姿でしか見られないのではないか。

算数の時限に、雪が降ってきた途端、先生が率先して『冬がきた』という歌を歌うよう促す授業運営上の柔軟性も、今の日本の学校教育現場では考えにくいことである。同様に、主人公の長兄が学校に上がる年齢になっても落ち着いて座り続けることができず、入学が一年遅れたり、主人公が子羊を連れて学校に行った際、先生が急遽、理科の教科書の中の羊の項目を学ばせたり、と臨機応変に対応する場面もある。彼我の教育の在り方の違いを感じさせられる話である。

村の湖でザリガニを取り、茹でて食べる話がシリーズの最後に出てくるが、これも日本ではあまり考えられない風習であろう。しかし、対象がザリガニでなければ、良くあることかもしれない。例えば、物語では、ザリガニを捕るための籠の網を補修し、網の仕掛けのためにボートに溜まった水を出し、仕掛けをした後は、樅木や岩の裂け目を利用して作った「小屋」や焚火の周りで眠り、翌朝にはザリガニ籠を引き上げ、一杯に詰まったザリガニを洗濯物用の籠に移し、持ち帰ることが記されている。これら一連の流れは、日本でも漁などをする人には共通する部分があるだろう。

老人が聖書の物語を幼い子どもたちに話して聞かせ、その老人の部屋には預言者の姿やヘビが悪行を働く様子を描いた絵画が飾られており、クリスマスには野生の鳥への施しをし、聖書のキリスト生誕の話を読むことなども、キリスト教徒が多い国で育ち、熱心な信者の娘であったアストリッドが描く、日本の多くの人からは異文化の日常である。加えて、主人公の隣家に住む友人の家に、年の離れた妹が生まれた後、その赤ん坊が白く長い洗礼用の服を着せられ、牧師がその家に来て、洗礼を授けるエピソードも等も、全く異なる文化体系で暮らす日本の学生たちには新鮮であろう。復活祭の前日の晩に大人が牧師の

家に招待されて行く間、子どもたちが卵に色を塗っておき、それをたくさん食べる卵パーティーをし、大人が隠した菓子入りの卵型の「復活祭の卵」を探し歩くことは、イースターの文化が一般的ではない現代日本からは異文化と映るであろう。ただし、本シリーズに出てくる老人の幼い頃は、お菓子入りの卵を探す風習がなかったことは、スウェーデンに於いてすら、復活祭の卵の習慣は意外と新しいものであることを示唆している。

復活祭の時、気付かれぬよう他人の背中に貼り札をして、からかう「水曜日の貼り札」と呼ばれる風習や、聖木曜日の夕方には子どもがブロッケン山の魔女の仮装をすることなどは、キリスト教文化と欧州の古い文化の両方が混交している事例だ。他にも、クリスマスにはショウガ入りのクッキーを焼き、瓶に入れたエンドウ豆の数を当てさせて大きなクッキーを賞品として渡すこと、貧しいひとり暮らしの家にクリスマスのご馳走や樅木（モミノキ）を届けること、樅木にショウガ入りクッキーやリング、干しブドウを入れた紙製の籠などを吊るすこと、日本ではサンタクロースと呼ばれる者をスウェーデンでは「クリスマスの小人」と呼ぶ話、新年に鉛を溶かして水に入れその年の占いをする、といったエピソードからも、古い欧州の文化を想起させられる。また、朝におかゆを食べて遊びに行く習慣、トルルのことなどは北欧の文化を知る手掛かりである。

家の畑仕事の手伝いでお金を貰って貯金する、という話も出てくるが、日本ではどの程度あるのだろうか。このシリーズでは、子どもたちが、通常場所で産卵しない雌鶏の卵を見つけたり、カブラを抜いたりすると、報酬として現金が親からももらえる場面が出てくる。また、首都ではサクランボが高く売られている、という新聞記事を読み、主人公の長兄のラッセが、自宅にたわわに実るサクランボを収穫し、国道筋で売ることを考え付く。そこで、村の子どもたちが『サクランボ会社』というグループ名を付け、協力し、工夫しながらサクランボを売るエピソードも出てくる。主人公は、そのようにして稼いだお金を、関わりのある他の子どもにも配分し、好きな物を少し買うために使うが、残りは全て貯金し、欲しいと考えている自転車を買おうとしている。このような、自分の力で稼ぎ、計画的にお金を遣う、という教育は、今の日本でも必要だと言われている。本シリーズは、この観点でも、重要な作品であろう。

また、当時のスウェーデンの農家のエピソードも興味深い。それは、農作業や家事を手伝う作男や女中がいること、クリスマスのソーセージを家で作ること、豚を買いに自宅へ人が来訪すること、飼っている子牛が生まれ、母乳が出ない母羊の子が死に、その兄弟を死なせないため、主人公が工夫して羊のミルクを与え続けること、気性の荒い牡羊が湖の島に隔離されていること、などである。他にも、自宅にある麦を水車小屋に出して粉に引いてもらうことや、ジャガイモ収穫時には学校から休みを貰うこと、なども描かれている。また、干し草置き場で様々な遊びをし、時にはそこで冒険的に眠る遊びも活写されている。これらは、かつての日本の農家でも見られたのではなからうか。

野イチゴを藁に通して数えることや、藁布団があることなどからは、藁を有効活用する

ことが激減しつつある現代日本では新鮮なエピソードだろう。靴屋で修理してもらった女中の靴を子どもたちが学校帰りに受け取ること、乳歯を自宅で抜くこと、抜歯が平気な子どもと、怖くて辛い子どもがいること、などは、靴も使い捨て、医療を簡単にアウトソーシングする現代日本では、新鮮に映るだろう。他にも、鉛を暖炉の火で溶かして兵隊のフィギュアを作る遊びや、やかまし村に電話がないので、学校の教師の病気による休校の連絡が入らなかった話、竈で調理をする話、森へ薪やクリスマスツリーにする樅木を取りに行く話、友人が眠っている間に抜いてやった歯を照明の紐に吊り下げる話、新しい書籍を貰ってワクワクする気分で本のおいを嗅ぎ、喜ぶということも、今では考えにくいことである。このような時代の変化を知るためにも、本シリーズは有用である。他にも、エイプリルフールに、時計を二時間進めて先生を騙すエピソードも、電波で自動調節する時計が、今よりも更に普及すると、過去のものとなっていくだろう。

ところで、アストリッドが描いた時代には問題にならなかったが、今はそれでは済まないようなエピソードが幾つかある。例えば、子どもたちがインディアンごっこをするシーンだ。これはかつての西部劇のように、アメリカ先住民の側からすれば、どのように感じるか、今の時代ではそのまま楽しめないエピソードである。また同様に、暗い洋服筆筒の中に黒人が入っている絵が黒で塗りつぶされている、という話も、今では批判されるだろう。差別の捉え方がこの半世紀にわたり、大きく変化してきたことが分かる。

加えて、都会から来た子連れの人婦が、「このような、森の奥に住んでいたなら退屈したり詰まらなくなったりしないのか」と、主人公の母親に尋ねるシーンがある。これを横で聞いていた主人公が、「やかまし村はいつも楽しい」と心の中で反発する。高度経済成長以降、日本では、地方の人の多くが都市部に憧れを抱き、もしくは仕事を求め、地方から人が流出しているが、この現状を省みさせられる話である。

森の奥にある水車小屋に住むユーハンという、大人嫌いの偏屈な男が出てくる場面からも深い学びができる。欧州では、水車はかつて不思議なものとして捉えられ、中世には差別の対象となっていた。人のいないところに住むユーハンのイメージも、それを引きずったものかもしれない。

本シリーズからは、地理や経済のこともかなり分かる。夏至の柱（五月の柱、Majstång、マイストング）を美しい花と葉がついた枝で飾り、それを立て、周囲で歌い踊るという場面が典型例である。この夏至を祝う風習は、高緯度地域では、冬の短い日照時間から離れ、明るく温かい夏を待ち望むことと関係している。スウェーデンでは、長い夏休みでも、朝晩は冷え込む様子が描かれている。また、真冬には、馬に橇を牽かせて遠くへ出かけること、氷結した湖から氷の塊を取り出し夏まで保管しておくこと、凍った湖でスケートをして遊ぶこと、寒い時は暖かい牛小屋で遊ぶ、等のエピソードもある。これらは、北欧諸国と日本の本州との地理的な条件の大きな違いを感じ取れるものである。湖の横に「蒸し風呂小屋」がある、というエピソードも出てくるが、それはサウナであろう。サウ

ナが北方で多く見られることも、地理的な条件と文化の関係を考える際に有用な事例だろう。

また、主人公らが、家出を計画する場面では、深く眠り込まないように、チクチクするヒノキ科の針葉樹の杜松（ネズ）の枝をベッドに敷く話がある。他にもネズの枝を切って小屋作りに利用する場面などがあるが、これらからは、ネズという植物について知る機会も得られる。

本文とは別に、シリーズ二作目と三作目の巻末にある、1965年に大塚勇三によって書かれた「訳者のことば」⁵⁾からは、スウェーデンの社会と経済、農業、この国が位置するスカンディナヴィア半島の地理、高緯度地帯における夏と冬の日照時間の違い等についても、当時の詳しい知識が得られる。

多くの人に有益な児童文学

上述した二種類の作品をみるだけでも、次のことが分かる。まず、児童文学作品は児童のものだけにしておくのは惜しい知識が詰まっていることだ。そして、作家の人生から学べることは数限りなくあることだ。つまり、児童文学作品や、それを生んだ作者の生活は大学での学び、生涯を通じた学習でも重要なことを教えてくれる。

また、冒頭に記したように、児童文学は大学生など大人になるかならないかの人々にとり、最も重要な、自己と他者の客観的な分析にも有用であろう。その理由は以下である。児童文学、ことに多くの子どもたちを惹きつけてやまない作品は、子どもの気持ちを巧く表現している部分が必ずある。例えば、『魔女ジェニファとわたし』の主人公とジェニファの喧嘩や、『やかまし村の子どもたち』シリーズの主人公と隣家の同年の少女の諍いのエピソードである。喧嘩をしたものの、その後は気まずく、寂しい気持ちや、仲直りした後の嬉しい気持ちが丁寧に描かれている。これは、どの子どもたちも、大人になった多くの人も子ども時代を思い出せば、強く共感できる話であろう。大学生などの青年のみならず、筆者も含む多くの「大人」と呼ばれる人々には、子どものような気持ちと、大人としての生き方をしなければならないという恥や義務などを含む社会的な意識の両方が混在している。そのような大人が、自身の子どものような部分を分析するために、児童文学作品に描かれた子どもたちの気持ちの動きを理解することが近道の一つとなるであろう。無論、同年輩や幼い子どもだけではなく、幅広い年齢層の他者の気持ちを理解するためにも、役立つであろう。例えば、前段に挙げた両作品の主人公と友達のような喧嘩は、大学生になっても、社会人になっても引き起こす人は意外と少なくない。そのような諍いを引き起こすに至った自身と他者の客観的分析は、子ども時代の気持ちを想起することで容易にできると考えられる。何故ならば、人の本質は大人も子どもも大きな差はないからである。また、喧嘩をせずとも、他者の言動に違和感や怒りを覚えた時、客観的な分析をすれば、自身や相手を冷静に捉え、衝突を回避することができる。

以上のように、児童文学作品は、大学生を含む大人にとっても、重要であろう。また、本稿では触れなかったが、十代の中高生を対象としたヤングアダルト作品、子どもから大人までを対象としたマンガ作品にも、似たような機能があると考えられる。今後、別の児童文学作品や、ヤングアダルト作品、マンガ作品についても、有用な具体例を挙げ、報告したい。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および特別研究費（課題名「芸術教養領域科目および全学総合共通科目における児童文学作品およびマンガ作品の教材利用」）の助成を受けた。児童書やマンガの膨大な作品群を前にして、何を讀むか迷ったが、複数の学生から現在の人気のある作品や、学生自身が影響を受けた作品を教えて貰った。また、名古屋芸術大学の教員および助手、事務職員の方々にご示唆を頂いた。北名古屋市図書館や名古屋市図書館の方々には閉架図書などの閲覧の労を取って頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 那須正幹、1984、ズッコケ三人組(9)ズッコケ財宝調査隊、ポプラ社。なお1986年にはポプラ社文庫版も出ている。
- 2) 赤木由子、1980、二つの国の物語〈第1部〉柳のわたとぶ国（理論社の大長編シリーズ）、理論社。第二部は「嵐ふきすさぶ国」（1980）、第三部は「青い眼と青い海と」（1981）と副題がついている。ただし、第一部になった『柳のわたとぶ国』は1966年に同社からシリーズではない単独の形で出版されている。シリーズ化を目途とした81年版には、原書にあった「まえがき」がないなどの違いがある。
- 3) 今江祥智、1973、ほんぼん（理論社の大長編シリーズ—ほんぼん）、理論社。第二部は『兄貴』（1976）、第三部は『おれたちのおふくろ』（1981）、第四部は『牧歌』（1985）、第五部は『優しさごっこ』（1977）、第六部は『冬の光』（1981）となっており、著者の幼少期から娘と暮らす父親時代までの自伝的小説となっている。第三部と第四部は、第五部や第六部よりも後に出版されている。また、これらのうち、一部は岩波少年文庫や新潮社文庫などになっている。
- 4) E. L. カニグズバーグ、松永ふみ子訳、1970、魔女ジェニファとわたし、岩波書店。1967年に原書が、1970年に松永ふみ子による邦訳が出た。本稿では、これを1989年に岩波少年文庫としたものを利用した。
- 5) A. リンドグレーン、大塚勇三訳、1965、やかまし村の子どもたち、やかまし村の春・夏・秋・冬、やかまし村はいつもにぎやか、岩波書店。同社が『リンドグレーン作品集4・5・6』として出版した。2005～2006年に、岩波少年文庫としても出版され、訳者のあとがきもそのまま掲載されている。
- 6) Tina Jordan, 2013, E. L. Konigsburg, Who Wrote 'From The Mixed-up Files of Mrs. Basil E. Frankweiler,' Has Died, Explore Entertainment, <https://ew.com/article/2013/04/20/e-l-konigsburg-has-died/>
- 7) 伊藤紀美江、児童文学を通して見た60年代アメリカの子どもの生活、2016、保育研究、第45号、37-47頁
- 8) Jens Andersen, 2014, Denne dag, et liv En Astrid Lindgren-biografi, Gyldendal, Danmark
- 9) アストリッド・リンドグレーン・ワールド公式WEBサイト、<https://www.astridlindgrensvarld.se/>